

林文子先生を偲んで

こころに関わる思い出

佐久間 貞行

林ミカエラ文子先生が昇天された。もっと生きていて戴きたかったのにとの思いは天にはとどかなかった。残念の極みではあるが、今は御冥福を祈るのみである。先生の思い出として私の内に在るのは、先生の人となり、容姿もさることながら、先生の言葉を通した「心」に纏わる事柄が多い。先生は信念の人であった。「人として善く生きたいから」との思いは、青年期には医師としての道を選び、壮年期にはキリスト信者としての道を求められた。患者にとって善き医者であろうとされた結果として、かって患者であった人々や、患者の家族であった人々との付き合いが永いものであったことにも示されよう。またあまり丈夫でなく、病気勝ちであったご自身の体力についても、その時々々の病状について冷静な判断と対処、病気に打ち勝つ気力を絶えず持たれていたが、今回の病気の最後の折は「今度はどうしても気力がでない。穏やかな死を迎えたい」と言われていた。そしてその死期を悟られたとき、召される白い衣装を用意され、意識の明晰なうちにと神父さんにベッドサイドに来て戴いて聖体拝領を受けられた。先生は人との出会いを大切にする人であった。教えを受けられた神父さんや学校の先生方との長いおつき合いは当然として、そのご家族とも深いおつき合いがあった。恩師のお一人高橋信次先生やご夫人も何かと御相談をされておられた。「私の財産は、アルバイト先などその時々々のまわりの方々との交誼と、計らざる展開から得られたもの、社会に還元したい」と、縁あって日本に留学している留学生の皆さんにも眼を向けられ、援助を心がけておられた。留学生の援助が健康文化振興財団の目的の一つになっているのもその故である。先生は反骨の人であった。固定観念から離れられない権力的な論議、或いは本筋から離れた議論を聞くことの多さに「帝国大学出の空論」との批評、反論をしばしば伺った。反骨精神は日常生活でも「私の衣料は殆どバーゲンですましているけど、でもけちでしているのではない。貯めたお金は世の中に役立てたい」とのお話から健康文化振興財団が誕生した。まだまだ思い出はつきないが、主に「心」にまつわる話を述べさせて戴き、林先生を偲ぶよすがとしたい。

(名古屋大学名誉教授・テルモ研究開発センター長)